

紹介

岩井忠熊 著

『明治国家主義思想史研究』

本書は、著者が一九五九年に発表された『日本近代思想の成立』につぐ二番目の著作であり、一九六〇～七〇年にかけて発表された論文をもとにしながらも、以下で紹介する一つの問題意識と分析視角にもとづいて、新たに手を加えたり、また新たに書き下ろしたりして一冊の本として首尾一貫したものになっている。

『日本近代思想の成立』から『明治国家主義思想史研究』という表題の変化は、この十年間の時代状況の変化と日本史研究の問題意識の変化、また著者の研究の深化の過程を直截に表現している感慨ぶかい。

さて、本書の紹介というところであるが、紙面に制限があるので本書の個々の分析についての紹介を避け、本書を貫いている問題意識、分析視角についての紹介と若干の感想を述べることによって、それにかえたい。

まず、はじめに結論的な事になって恐縮であるが、本書が現在の日本思想史研究上

でどのような位置を占めるのか、いわば本書のユニークな点について述べよう。

第一に、丸山真男を頂点とする近代政治学が日本思想史研究、とりわけ近代天皇制国家のイデオロギー研究で残した成果をいかに克服し発展させるか、ということを明確に意図していることであり、さらに、それを近代政治学のグループがやったと同じように、いわば「頂点思想家」の分析を通じて行っている点である。

一九五〇年代末～六〇年代にかけての思想史研究は、村上重良の民衆宗教の研究や安丸良夫・色川大吉らの民衆思想の研究に代表される如く、研究の対象を「底辺思想」の研究にはっきりと移してきた。そもそもこれら「底辺思想」の研究は、学問的には先に述べた丸山真男らの近代政治学のうたった近代天皇制イデオロギー研究の克服、発展を新しい時代状況を踏まえて試みたものであった。それだけにこれら一連の「底辺思想」の研究は、歴史学研究や思想史研究に一つの新しい息吹を吹きこんだのであった。

しかし、この新しい研究方向も、それが「流行」するにつれて、他の例にもれず次第に当初の問題意識を希薄にし、問題意識

のきわめてボケた、また狭い研究が「底辺思想」研究という錦の御旗の下に氾濫するという状況を呈しているかのようにみえる。こうしてみれば、本書のこの第一のユニークな点は明瞭であろう。

つぎに、本書の第二のユニークな点は、本書がイデオロギー分析の中でも特にナショナリズムの問題をとり出している事である。日本においてナショナリズムの科学的研究は不思議な程に質量とも少い。丸山真男においてもナショナリズムの問題は、超国家主義の問題としてのみ扱われ、日本におけるナショナリズム―著者の言葉を借りれば、民族主義・国民主義・国家主義といった多様な側面を持つ―の全体的な分析は示唆的なものにとどまっておき、丸山以後の近代政治学にあつては、他の分野において丸山の業績を進展させながらも、ことこのナショナリズムの問題に限つては、全くといっていい程、発展させる事はできなかったし、むしろ忘れさられてしまった問題であった。

一方、近代政治学の後を襲つた「底辺思想」の研究においても、このナショナリズムの問題は事実上、等閑にされてきた、といつても過言ではないだろう。こうしてみ

れば、本書のこの第二のユニークな点もう
なずけるであろう。

では、右に述べた二点に亘る本書のユニ
ークな点は、はたしてどのような問題意識
から導き出されたものであろうか。本書を
一貫している問題意識についてみてみよう。

「日本ナシヨナリズムの科学的解明は、
われわれ日本人にとって、たんに興味ある
仕事であるにとどまるものではない。それ
をなしとげ、それを克服しなければ、日本
人にとって、未来に生きる事の意味を見出
し得ない程切実な事業なのではないだろう
か」。著者をしてかく言わしめたものは何
か、それは現代日本における帝国主義・軍
国主義の復活であり、その思想としての近
代化論における日本ナシヨナリズム（ここ
では国家主義思想と限定すべきもの）の肯
定的評価であり、また教科書検定にみられ
る天皇制イデオロギーの復活であった。と
くに近代化論が、日本国民の中にある「西
欧近代社会」を素朴に肯定する風潮に乗っ
かり、西欧近代社会のナシヨナリズムに
日本の国家主義思想を相似させる事によっ
て、欧米帝国主義を非難から救い出すこと
もに、太平洋戦争にいたる日本軍国主義の
戦争責任の免罪へ導く論理をその核にもつ

ている事。そしてこれこそ復活しつつある
日本帝国主義・軍国主義の論理であること
を重視するのである。

このような問題意識にたつた時、著者は
はじめ、従来のナシヨナリズム研究史に
批判的に迫り得たのであった。つまり従来
のナシヨナリズム研究は、一つは一七七一
九世紀ヨーロッパ近代資本主義の形成過程
の史的究明の追及、いわゆる「民族問題」
であり、もう一つはアジア・アフリカのナ
シヨナリズムであった。日本史研究に圧倒
的な影響を及ぼしてきたのは、なかなしく
前者であった。これらに対して著者は、ナ
シヨナリズムの問題を従来の研究視角とは
全く違う、帝国主義の問題として考えるこ
ういう視角を提出しているのである。「民族
は必ずしも『勃興期』に限定されない資本
主義時代の歴史的範疇となる。独占資本主
義が資本主義であることをやめないように、
帝国主義の思想もナシヨナリズムであるこ
とをやめようとしなさい」。

このような研究視角にたつ時、近代天皇
制国家イデオロギーの特質の分析視角とし
て、丸山に代表される如く、「前期的ナシ
ヨナリズム」あるいは「中性国家」論とい
った視角、つまりヨーロッパの資本主義勃

興期におけるナシヨナリズムとの対比から
の日本ナシヨナリズムの特質の分析とは異
なる新しい分析視角を発見し得たのである。

著者が提出し得た近代天皇制国家イデオ
ロギーの新しい分析視角とは何か。まず一
般的には天皇制国家の思想の研究は、それ
を特定の時代的規定性においてとらえる
事を主な課題としなければならないとする。
それでは近代天皇制国家思想の時代的規定
性として著者が最も注目したのは何か。
それがナシヨナリズムの問題であったので
ある。

「ナシヨナリズムとは国民国家の形成・
維持発展をめざす運動であり思想である。
そこでは封建時代の身分制国家とは異なり、
平等な身分の国民の存在とそのような国民
の政治的・思想的な自発性が前提されてい
る」。日本史においてこのようなナシヨナ
リズムが形成されたのは、明治維新の時期
であり、日本の国民は、それ以後は「もは
やたんなる政治の客体の境遇を脱却し、そ
の主体となるべく運動をはじめた」。「超歴
史的」天皇制思想が明治維新にはじまる日
本の近代から受けた時代的規定性は、ま
ず何よりもこのようなナシヨナリズムに見
出されなければならない。明治維新の天皇

制は、当時の歴史的規定をうけた日本人の存在を前提とし、それに対応し、かつそれにある程度依拠して構築されたのであった。またそれ故にこそ、多くの国民を獲得することができたのである、とする。

本書は、前著『日本近代思想の成立』とほぼ同じく明治維新から明治三十年代にいたる明治期の主要な思想を分析対象としながら、右にのべたような分析視角を駆使して、前著とは全く趣きの異なったものになっている。

以上、本書の現在における近代日本思想史研究上の位置、ならびにそれをもたらした問題意識、分析視角について簡単な紹介をおこなってきたが、最後にそれらについての一、二の問題点を指摘しておこう。

一つは、ナショナリズムを資本主義時代を貫く問題として、とりわけ帝国主義の問題として把握するという問題意識に共鳴しつつも、ナショナリズムの問題は資本主義社会をもっておわるのであろうかという単純で素朴な疑問である。現代における社会主義国家であるソ連や中国、またベトナムの問題は、ナショナリズムと無関係にあるのだろうか。また現代日本のことを考える

場合においても、「真の民衆はナショナリズムを克服する」と単純に割りきれられるものか、ということである。

二つには、そのことは、とりもなおさず、著者はナショナリズムとは国家主義・民族主義・国民主義の「三者の統一あるいは、その三者を部分とする全体である」とナショナリズムの総体的把握の指摘を行いながらも、本書においては、事実上それを国家主義思想という側面だけに他の二者を収斂させてしまっているという問題である。つまりナショナリズムの構造的有機的把握が不十分におわっているということである。

もっともこれらの問題点は、簡単に答えの出せるものではなく、著者を含めて、私たちの今後の課題というべきであろう。

ともあれ、本書は、最初に述べた如く、現在の近代日本思想史研究においてユニークな位置を占めるものであり、とりわけ近代天皇制国家のイデオロギー研究の意欲をそそのかに十分な著作であり、さらには「底辺思想」研究にも新たな課題を与えたものと言える。

また、現代日本のイデオロギー分析、批判においても、一つの貢献をなすであろうことは疑いのない事である。

(A5版二九二ページ 一九七二年一月刊 青木書店発行 定価一、五〇〇円)

(中島三千男・京都大学大学院学生)

更池村文書研究会編

『河内国更池村文書 第一巻』

河内国丹北郡更池村は、現大阪府松原市にあり、文禄検地一四四石余の小村であったが、初期には天領、のち秋元領として幕府中枢部の支配に属し、堺から大和へ通ずる長尾街道が村内を貫通し、狭山池西除川溜池灌漑地帯にふくまれるなど、近世畿内農村として一つの典型たるを失わない条件をもち、その上多数の古文書が旧庄屋田中氏宅に保存されていた。

このため、高尾一彦氏によって神戸大学の「研究」三号(昭28)にこの村の村落構造が分析発表されて以来、多くの研究者の注目をひき、史料を利用した人の数も知らない。主としてこの史料によって論旨を展開した単行本だけでも、高尾氏の『近世の農村生活』(昭33)、葉山禎作氏『近世農業発展の生産力分析』(昭44)があり、私も『近世封建社会の基礎構造』(昭42)で